様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２２ 日現在

機関番号：１１３０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３８１２３１

研究課題名（和文）教員養成における児童の音痴克服歌唱指導プログラムの開発と適用

研究課題名（英文）Development and application of singing instruction program to overcome onchi of pupil teacher training

研究代表者
小畑　千尋（OBATA, CHIHIRO）

宮城教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：２０３６４６９８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、教員養成における児童の内的フィードバック能力（自分自身の歌唱の音高・音程が合っているかどうかについての認知）の獲得と心理面に着目した音痴克服歌唱指導プログラムの開発と適用である。小学校教員養成課程に在籍する大学生を対象とした調査、小学校での内的フィードバックができるための歌唱指導の結果などを踏まえて、音痴克服歌唱指導プログラムを開発し、本プログラムを用いた指導を教員養成課程の学生を対象に行った。さらにプログラムに参加した学生が小学校において児童を対象に歌唱指導を実践し、本プログラムの有効性を検証した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study to acquire the ability for internal feedback (recognition of correct tone and pitch of own singing) of pupils in teacher training, and to develop and apply a singing instruction program to overcome “onchi” that focuses on psychological aspect. The authors have developed a singing instruction program to overcome “onchi” based on the survey for undergraduates in the primary school teacher training course and results of singing instruction for internal feedback in primary schools, and performed instruction using this program for the students in the teacher training course. Moreover, the students who participated in the program practiced singing instruction for pupils in primary schools and verified the validity of this program.

研究分野：音楽教育学

キーワード：音痴克服　歌唱指導　内的フィードバック　教員養成　児童

１．研究開始当初の背景

小学校では音程が著しく外れる児童に対して、教師が具体的な指導を敬遠する傾向にある。その原因として、児童に劣等意識を植え付けてしまうことを危惧するだけでなく、そもそもどのように指導したらよいのかを教員が分からないことが考えられる。

音痴克服には、内的フィードバック能力、つまり、自分自身の歌唱の音高・音程が合っているかどうか認知できる能力の獲得が必須である。縦断的歌唱調査からは、小学４年生では約 50%の児童、６年生では卒業間近の２月の段階でも、約 25%の児童が内的フィードバックができないことが分かった（小畑 2012）。同時に、小学校の音楽の授業における継続的なフィールド調査と事例指導から、児童に対する指導スキルと成人対象者に対して有効であった指導スキルとの差異も明らかとなった（小畑 2010）。また、児童の歌唱に対する意識調査を実施し、内的フィードバックは、歌唱活動における意欲、自信、自己肯定感にも強く関連することが示唆され、歌唱指導の際に、児童の内的フィードバックを意識して指導を行うことの重要性が改めて浮き彫りとなった　（小畑 2011）。

これらの研究成果を用いて、実際の教育現場で児童の音痴克服の指導ができるためには、指導者を育成するための指導法の確立が必要である。将来小学校教員となる教員養成課程の学生たちが、児童の内的フィードバックを発達させる、音痴を克服させる指導技能を身につけることができれば、教育現場において、児童の歌唱技能の向上、さらには児童の自己肯定感の向上に強く繋がる指導ができるようになる。

２．研究の目的

本研究の目的は、教員養成課程における児童の内的フィードバック能力の獲得と、児童の心理面に着目した音痴克服歌唱指導プログラムの開発と適用である。具体的に以下の３項目を実施する。

(1) 小学校教員養成課程の大学生を対象に、歌唱に対する意識についての調査を実施し、2000 年同調査結果との比較、また音痴意識と歌唱に対する意識との関連等の傾向を把握する。同時に、音痴意識のある学生、正しい音程で歌うことが難しい学生を対象に、内的フィードバックに着目した歌唱指導を行う。

(2) 教員養成課程に在籍する学生同士によるロールプレイを通して音痴克服指導のトレーニングを行う。

(3) (2)のトレーニングを受けた学生たちが、内的フィードバックに着目した歌唱指導を実践し、指導の有効性について検討する。また、筆者以外の大学教員により指導法の検証を行い、より一般化できる指導法を構築する。

３．研究の方法

(1) 小学校教員養成課程に在籍する大学生合計約 1000 名（2013 年はＡ大学・Ｂ大学・Ｃ大学、2014 年と 2015 年はＡ大学）を対象に、自身の歌唱に対する音痴意識を問う質問紙調査を実施する。質問紙は、筆者が開発した音痴意識を問う質問紙調査（Obata 2003）を基に作成する。

内的フィードバックに着目した事例指導については、声によるピッチマッチ、既成曲の歌唱、内的フィードバックができているかどうかについて調べる。調査過程はすべて録音記録を取る。

(2) (1)の分析結果と大学生を対象とした音痴克服のグループ指導（Obata 2008; 小畑 2013）における学生同士の効果的な関わりのスキルを踏まえ、音痴克服のための歌唱指導プログラムを作成し、大学生にそのプログラムの実施方法についての指導を行う。児童に対する指導内容は、児童の音痴克服のための指導モデル[平成 18～20 年度科研費　課題番号 18730547]と児童の認識の発達を促す音痴克服指導教材[平成 21～24 年度科研費　課題番号 21730707]を用いて行う。指導過程の録音・録画記録の分析と、参加者による評価により、指導方法の検証を行う。

(3) 小学校高学年で音高・音程が不安定な児童に対して(2)でトレーニングを受けた学生が指導を実践する。同時に小学校教員養成課程で音楽科指導法を担当するＣ大学の音楽教員Ｇ氏が、小学校教諭免許取得予定の学生を対象に指導を実施し、指導法の有効性について検証する。

４．研究成果

(1) ① 小学校教員養成課程に在籍する大学生を対象とした自身の歌唱に対する音痴意識関する質問紙調査

2013 年は、小学校教員養成課程に在籍する大学生 493 名（国立Ａ大学の学生 258 名、国立Ｂ大学の学生 154 名、私立Ｃ大学の学生 81 名）を対象に、2014 年は国立Ａ大学の学生 238 名、2015 年は国立Ａ大学の学生 264 名を対象に自身の歌唱における音痴意識に関する質問紙調査を実施した。

ここでは、2013 年のＡ大学の学生 258 名の結果を、2000 年調査（国立Ｄ大学）の結果との比較を中心に報告する。

自分自身のことを「非常に『音痴』だと思う」に 8%、「少々『音痴』だと思う」に 37%の学生が回答しており、合計 45%の学生が自分自身を「音痴」だと意識していることがわかった（図１参照）。本調査結果と 2000 年の調査結果（小畑 2002）を、カイ二乗によって検定したが、5%以下の有意差は認められず（χ^2=2.94, df=3,P>.05)、「音痴」意識を持つ学生の割合に変化がないことが明らかとなった。

また、過去に他者から「音痴」と言われたことのある学生は 29%、「音痴」と言われたことのない学生は 71%という結果となり、この結果と「音痴」意識を持っているかどうか

との間に、2000 年の調査と同様に、やや高い相関がみられた（r = .54, p < .001）。

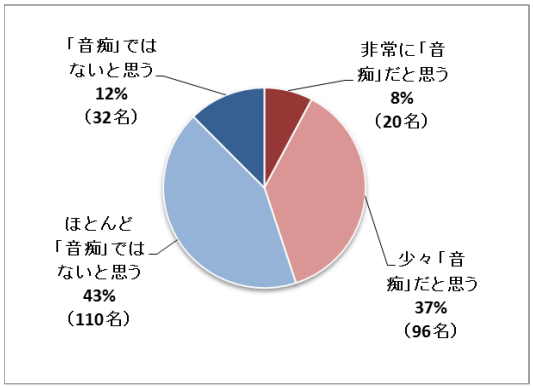

図１　質問　「自分自身を『音痴』」だと思いますか？」

自身の「音痴」意識と「音痴」意識を持ち始めた時期との関連については、2000 年の調査結果と同様に、2013 年も「非常に『音痴』」だと意識している学生が「音痴」だと意識し始めた時期として一番多いのが「小学生の頃」、そして次が「中学生の頃」となった（表１参照）。「少々『音痴』」と意識している学生が、「音痴」だと意識し始めた時期として一番多いのも「中学生の頃」と 2000 年と同様で、続いて「高校」「小学生の頃」というのも同じ結果となった。

表１　質問　「自分自身を『音痴』だと思うか」と「音痴」意識を持ち始めた時期との関連

自分自身を「音痴」だと思うか？ ／ 「音痴」だと意識し始めたのは？	非常に「音痴」だと思う		少し「音痴」だと思う		合　計	
保育園･幼稚園	0	0%	4	4%	4	3%
小学校	10	50%	16	17%	26	22%
中学校	6	30%	50	52%	56	48%
高等学校	4	20%	19	20%	23	20%
大学	0	0%	7	7%	7	6%
合　計	20名	100%	96名	100%	116名	100%

②　音痴意識のある学生、正しい音程で歌うことが難しい学生６名を対象に、内的フィードバックに着目した歌唱指導の実践を行った。ここでは聴覚障害のある学生Ｅを対象とした指導事例について報告する。

大学生Ｅは小学校教諭免許・特別支援学校教諭免許を取得予定の学生で、聴覚に重度の障害がある。指導開始時同一音高で発声し続けること、内的フィードバック共に難しい状態にあった。20XX 年４月 11 日から 11 月 20 日（第１回～第 20 回）の約７か月間に、１回 30 分から１時間の指導を実施した。

指導方法は、直接的修正行動、規範例示からなる外的フィードバック（指導者が対象者の歌唱に対して行う評価行動の中で、特に音高・音程に関するもの）を用いた（小畑 2007）。指導内容は、腹式呼吸、同一音高で発声し続ける練習、声によるピッチマッチ、《たこたこあがれ》《ほたるこい》《ひらいたひらいた》などである。

指導の結果、Ｅの内的フィードバックの向上がみられ、重度の聴覚障害があっても、指導により内的フィードバックができることが示唆された。指導においては、健聴者の「音痴」克服指導で用いていた外的フィードバックをそのまま適用することができた。また、指導過程においては、Ｅが健聴者とのコミュニケーション手段として「話す」ための発声ではなく、同一音高で発声した際の共鳴感覚を感じる、「歌う」ための発声を楽しむ場面が多々観察された。

(2) 教員養課程に在籍する学生約 100 名を対象に、音痴克服指導のトレーニングを行った。

指導プログラムは音痴意識と心理的サポート・歌唱における内的フィードバックについての講義、そして実際に学生同士で指導法を実践する演習により構成される。演習では、実際の音楽の授業を想定して、ペアでの声によるピッチマッチ、グループによる声のピッチマッチ、児童の内的フィードバックの確認、内的フィードバックを実感できるために声を増幅させて共鳴感覚を体感させる指導などをロールプレイ形式で学ぶ。

参加者からは、『“苦手な子が合わせる”ではなく、“苦手な子に合わせる”ことが無理なくできるもので、音を合わせることが苦手な子も“これが合ったということか！”と分かりやすい」「実際に教員になる前にこのような指導の方法を知ることができて良かった」「音が合っているか自信がない人でも参加しやすい」「生徒だけでなく教師の耳のトレーニングにもつながる」「声の増幅による共鳴体験は、大学生である自分がやってもとても気分の良い」などの評価が得られた。

(3) ①(2)でトレーニングを受けた学生がＦ小学校の児童６年８名を対象に 2015 年２・３月に合計４回歌唱指導を実践した。同時に②小学校教員養成課程で音楽科指導法を担当する他大学の音楽教員Ｇ氏が、小学校教諭免許取得予定の学生Ｈに本指導法のトレーニングを実施し、学生Ｈが内的フィードバックができず音痴コンプレックスのある学生Ｉに歌唱指導を実践した。これらの指導の分析を通して、本指導法の有効性について検証を行った。ここでは、②について報告する。

2015 年 3 月、(2)の指導法を用いてＧ氏が学生Ｈに指導を行った。同年３月、対象者についての予備調査を行い、学生Ｈが学生Ｉを対象とした歌唱指導を９月から 12 月までの間、計４回実践した。第１回、第３回、第４回の実践にはスーパーバイザーとしてＧ氏

が、第３回の実践にはＧ氏に加え、筆者も同席した。
　ＨによるＩを対象とした指導の過程で、Ｉの内的フィードバックの向上と歌唱行動に変化がみられ、本指導を用いた指導の効果がみられた。

　(2)と(3)を総括して、(3)②の事例の分析からは、実践の過程でＧ氏によるＨへのサポート体制が整っていたことも、本実践が効果的に実施された要因のひとつと考えられる。(2)のロールプレイを通してのトレーニングは効果が認められたが、実際に内的フィードバックができない対象者を想定することには限界がある。(3)②の事例のように、ロールプレイでの指導法の学習の後、内的フィードバックができない対象者への指導実践の過程で、スーパーバイザーによる指導を受けることが、より効果的であることが明らかとなった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）
① 小畑千尋・佐藤里紗・水戸まりな・山崎夏実・菊地真季子・八木沼賢悟（2014）「参加者同士の関わりを目的としたボディパーカッション活動―宮城県丸森町立丸森中学校に於ける復興支援―」『宮城教育大学 教育復興支援センター紀要』第３巻，pp.79-86．査読無
https://mue.repo.nii.ac.jp/
② OBATA, Chihiro (2013) A longitudinal Study on Internal Feedback in Singing of Children: Through Analysis of Change from Fourth to Sixth Grades in a Primary School, *Proceedings of the The 9th Asia-Pacific Symposium on Music Education Research (CDROM)* pp.1-8 (No.32)　査読有

〔学会発表〕（計６件）
① 小畑千尋、佐藤里紗、水戸まりな、山崎夏実、菊地真季子、八木沼賢悟（2015 年 2 月 21 日）「再編統合された中学校における参加者同士の関わりに着目したボディパーカッション活動―宮城県丸森町立丸森中学校に於ける復興支援―」日本音楽教育学会東北地区例会　弘前大学（青森県弘前市）
② 小畑千尋（2014 年 10 月 26 日）「小学校教員養成課程の学生自身の『音痴』意識―2000 年同調査との比較を中心として―」日本音楽教育学会第 45 回全国大会　聖心女子大学（東京都渋谷区）
③ OBATA, Chihiro （2014 年 7 月 22 日）Singing Instruction for Hearing Impaired Student: What can be Seen from the Process of Acquiring Ability for Internal Feedback, *The 31th International Society for Music Education World Conference*, Porto Alegre, Brazil.
④ 小畑千尋、菊地亮、今野圭一朗、最上陽子、加藤博行、小松さな恵、増村海（2014 年 3 月 15 日）「東日本大震災で被災した小学校における音楽支援―教員養成課程の学生による生演奏を活かした授業の試み―」日本音楽教育学会東北地区例会
秋田大学（秋田県秋田市）
⑤ 小畑千尋（2013 年 10 月 13 日）「聴覚障害学生を対象とした歌唱指導―内的フィードバック能力の獲得過程からみえるもの―」日本音楽教育学会第 44 回全国大会
弘前大学（青森県弘前市）
⑥ OBATA, Chihiro（2013 年 7 月 17 日）A longitudinal Study on Internal Feedback in Singing of Children - Through Analysis of Change from Fourth to Sixth Grades in a Primary School –, *The 9th Asia-Pacific Symposium on Music Education Research*, Singapore, Singapore.

〔図書〕（計１件）
① 小畑千尋（2015）『オンチは誰がつくるのか　オンチ克服への第一歩』パブラボ
280 頁

〔その他〕
① 小畑千尋（2016 年 3 月）コラム「音痴」『ニュートン別冊　眼，耳，鼻，舌，皮膚など人体に備わる高性能センサー　感覚―驚異のしくみ』pp.112-113．（協力）
② 小畑千尋（2015 年 10 月 26 日）東北の本棚　拙著『オンチは誰がつくるのか　オンチ克服への第一歩』書評 河北新報（朝刊 21 面）
③ 小畑千尋（2015 年 9 月 28 日）拙著『オンチは誰がつくるのか　オンチ克服への第一歩』書評 金融経済新聞（朝刊 8 面）
④ 小畑千尋（2015 年９月 18 日）拙著『オンチは誰がつくるのか　オンチ克服への第一歩』書評 千葉日報（朝刊 18 面）
⑤ 小畑千尋（2015 年 3 月 22 日）「オンチってなおるの？」河北新報 かほピョンこども新聞（協力）
⑥ 小畑千尋（2014 年 10 月）「『音痴』は歌の発達途中です」『まなびのめ』第 26 号　笹氣出版印刷（協力）

６．研究組織
(1)研究代表者
小畑　千尋（OBATA, Chihiro）
宮城教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：２０３６４６９８